

■ゴルトマルク／ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調 Op.28

カール・ゴルトマルク（1830-1915）はハンガリー出身のユダヤ人作曲家である。世代としては盛期ロマン派から後期ロマン派へと変化していく時代に生き、ブラームスより3歳年上で、マーラーが亡くなった4年後に他界している。中流階級の子沢山の家生まれで苦学しながら、まず、ヴァイオリンを学んだ。やがてウィーン音楽院にも進学するが、1848年には革命の動乱を逃れてエデンベルクやオフェンの劇場オーケストラで演奏を始める。その後、ウィーンでも同様のポストにつくが、1858年、独学で書き始めた作品による初めての個展を開いた。当初、厳しい批判にさらされたが、2回、3回と重ねて、少しずつ評価も高まった。代表作は歌劇「サバの女王」で、オペラも計6曲書いている。

ヴァイオリン協奏曲第1番はゴルトマルクの作品の中でも、今日もレパートリーとして残っている数少ない曲の一つ。1877年、ザルツカンマーグートにあるトラウン湖沿いの街グムンデンで作曲され、祖国のヴァイオリニスト、レオポルト・アウアーに献呈された。初演ではドレスデンの宮廷楽長のヨハン・ロイテルバッハが独奏し、その輝かしい演奏が新聞で賞賛されている。急・緩・急の伝統的な3楽章構成。第1楽章アレグロ・モデラートは決然としたオーケストラの楽想で始まり、独奏ヴァイオリンが技巧的なパッセージを交えながら、ラプソディックな、あるいは抒情的なメロディを奏でていく。この楽章を聴いただけで、盛期ロマン派の作風がしっかり伝わってくる。ときおり哀感の漂う歌謡旋律も現れ、カデンツァも魅力的。冒頭の勇壮な楽想で終わる。第2楽章アンダンテは「エア」と題された緩徐楽章。ゆったりとたゆたうようなオーケストラの序奏で始まり、独奏はメンデルスゾーンをほうふつとさせるメロディをたっぷりと歌う。第3楽章はモデラートの短い導入部に続いて、アレグレットの主部となり、独奏はダンス風のリズムをもつ主題を弾く。すばやい装飾的な楽想など難しい技巧が凝らされた走句を楽しませる一方、しっとりとしたメロディでうっとりさせる部分も忘れない。シューマンやメンデルスゾーンの伝統を受け継ぎながら、新たな書法を模索した佳作である。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。